

## 複合動詞の内部構造と機能範疇 $v$ の存在

大倉 直子  
(神田外語大学)

### 要旨

本稿では、「押し開く」「書き終える」のようなV-V型複合動詞 (Kageyama 1989、影山 1993) の統語構造を考察する。もし動詞の項構造が統語構造で規定されるならば (Hale and Keyser 1993)、複合動詞であってもそれが構築する項構造と適格性は、動詞と機能範疇の併合によって派生される統語構造に基づいて決定されるという結論が導かれよう (Hasegawa 1999, 2000)。この仮説のもとに本稿では、影山の複合動詞のタイプ分けと論考を基盤としながら、Sakai, Ivana, and Zhang (2004) で提案された「する」の分類を応用して、複合動詞の項構造や性質の相違が統語構造の相違、即ち語彙動詞と機能範疇の併合のされ方により説明されることを示す。

キーワード：複合動詞、小動詞  $v^*/v$ 、自他交替、「する」代用表現、連用形接辞

## 1. 複合動詞の先行研究

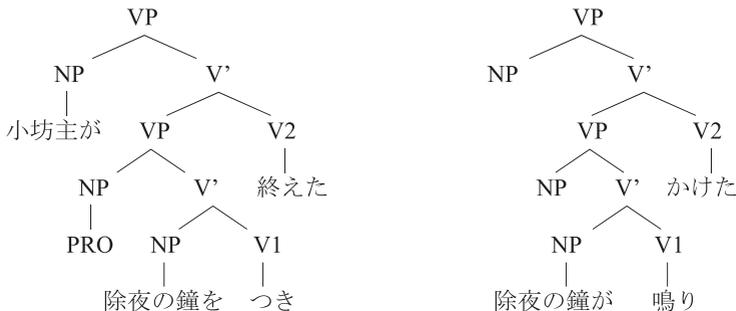
### 1.1 影山 (1993)

日本語において2つの動詞が結合するプロセスは、日本語の生成文法初期から盛んに研究されてきた (久野 1973、Nakau 1973、井上 1976、柴谷 1978 など)。しかしその多くは、使役の「させ」、願望の「たい」などの助動詞や接辞と動詞の結合を扱ったものであった。この分野の研究に大きな発展をもたらしたのが影山 (1993) である。影山は、「押す」と「開く」で「押し開く」が形成されるように、独立した2つの動詞が結合する例を扱った。そして、表面的には同じように見えるV-V型複合動詞が異なる内部構造を持ち、「語彙的」に形成されるものと「統語的」に形成されるものに分けられることを主張した。影山の扱った複合動詞とその分類は、主に以下のようなものである。

- (1) タイプA「語彙的複合動詞」  
 a. 押し開く、殴り倒す、洗い落とす、飲み歩く  
 b. 太郎が扉を押し開いた。
- (2) タイプB「統語的複合動詞：他動詞型補文構造」  
 a. ～終わる、～忘れる、～尽くす、～そこなう  
 b. 花子が論文を書き終えた。
- (3) タイプC「統語的複合動詞：非対格型補文構造」  
 a. ～かける、～だす、～過ぎる、～続ける  
 b. リンゴが木から落ちかけた。<sup>1</sup>

影山はまず、複合動詞を生産性や統語的なふるまいの違いから、語彙部門で生成される「語彙的複合動詞」（タイプA）と、統語部門で生成される「統語的複合動詞」（タイプB、C）を区別した。<sup>2</sup> つまり、語彙部門と統語部門の両方に語形成機能があることを認める必要性を主張したわけである。さらに、統語的複合動詞を、意味や受動化の観点から異なる補文構造を持つとして、「他動詞型補文構造（V2が独自の主語と補文を取る）」（タイプB）と「非対格型補文構造（文全体の主語がV2と直接関わらない）」（タイプC）に分類した。

- (4) a. 小坊主が除夜の鐘をつき終えた。      b. 除夜の鐘が鳴りかけた。  
 (統語的：他動詞型補文構造)                      (統語的：非対格型補文構造)



(影山 1993: 141, 142 の図にVの番号を加筆)

影山はさらに、V1の目的語が受動化できる（いわゆる長距離受動ができる）ものについては、補文はVPでなくV'であるとしている。<sup>3</sup> 一方、(4b)の非対格型補文構造は、V2が外項を持たないいわゆる繰り上げ文(raising)の形となっているが、日本語においてはV'の中で格を与えることが可能なので英語のような主語繰り上げを行う必要はないとしている。<sup>4</sup> このように、タイプBとタイプCの複合動詞では、V1とV2が独立した動詞で統語的に結びつけられているが、タイプAの「語彙的」複合動詞は、語彙部門で項構造の「合成・融合」が起こり、1つの動詞となって統語部門（深層構造）に挿入されると議論している。

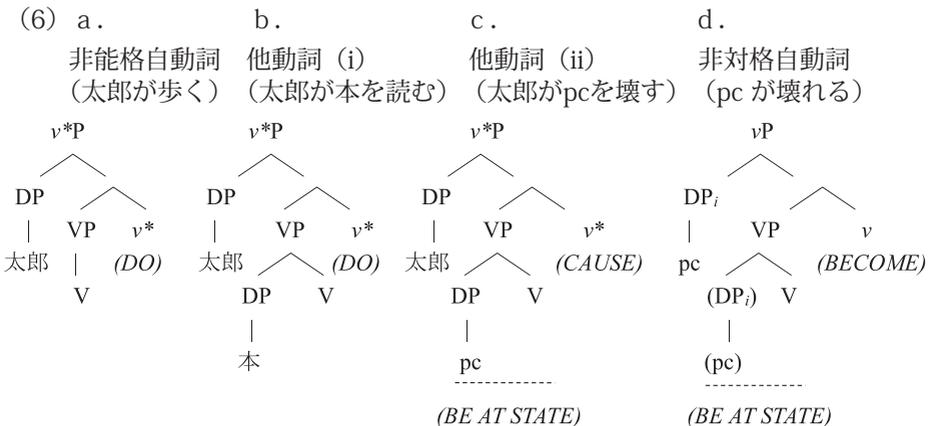
影山の研究は画期的で、複合動詞研究の基盤となりその後の発展を導くものであった。しかし、理論の変化に伴い、異なる見方も可能となってくる。1990年代から発展してきたミニマリストプログラム(Chomsky 1995)のもとに提示されている仮説に従えば、かつてのGB理論(Chomsky 1981)で想定されていたような、語彙が挿入されるレベルとしての深層構造や、統語操作が適用されて表示されるレベルとしての表層構造の区別はなく、心的辞書から選択された要素には「概念 - 意味システム」(C-I interface)へと続く1本の派生の道(narrow syntax)があるだけである。つまり、語の項構造は統語派生に入る最初の段階で決まっている必要はなく、途中で派生され、最終的に概念 - 意味システムで適格に解釈されればよいということになる。そうすると、これまで語彙部門で扱われてきた動詞の項構造自体が、派生した統語構造であり、項構造は句構造によって規定される(Hale and Keyser 1993, Marantz 1997, Hasegawa 1999, 2000, Pyllkänen 2002)という考え方が可能となる。この考え方に基づき、以下では、複合動詞の性質は動詞の語根がどのように機能範疇(小動詞  $v^*$  など)と併合(Merge)されて構造を形成するかによって決まることを議論する。

本稿では、第2節でより詳しく述べるが、「そうする・そうなる」代用テストを  $v^*$  の存在の検証として使っていく。影山(1993)では「そうする」代用テストが、語の一部だけが照応に参加することはできないという「語彙照応の制約」に違反するかどうかを調べて語彙的複合動詞と統語的複合動詞に分類するために使われた。本稿では、先に述べたように語彙的・統語的で区別をせず、自動詞・他動詞の違いを  $v^*$  の違いに還元し、「そうする」代用表現に「そうなる」を加えた「そうする・そうなる」代用テストを提案して検証を行っていく。

## 1.2 動詞の内部構造

複合動詞の議論を進める前に、動詞の分類と内部構造の先行研究を概観しておこう。先に言及したHale and Keyser (1993) の議論、さらに、Chomsky (2001)、Hasegawa (2001)、Sakai et al. (2004) などの小動詞  $v^*V$  の研究により、項構造、語彙概念構造、アスペクトの3つが統合されて表示されることが可能となった。(5) の例文を図にした (6) は、その統合モデルの1つである。カッコ入りの斜体は語彙概念構造の意味述語を表す（影山 1993: 69-71、伊藤・杉岡 2002: 27などを参照）。アスペクトの観点から見れば、(6a) と (6b) は活動 (activity) 動詞、(6c) は達成 (accomplishment) 動詞、(6d) は到達 (achievement) 動詞に該当する (Vendler 1967、Dowty 1979参照)。

- (5) a. 非能格自動詞: 太郎が歩く。 / Taro walks.  
 b. 他動詞 (i) : 太郎が本を読む。 / Taro reads a book.  
 c. 他動詞 (ii) : 太郎がpcを壊す。 / Taro breaks the pc.  
 d. 非対格自動詞: pcが壊れる。 / The pc breaks.



ここで重要なのは、(5c)/(6c) と (5d)/(6d) の対応である。動詞には、「壊す・壊れる」「溶かす・溶ける」のように自他の対応を持つものがある。例えば、(6c) の「太郎がpcを壊す」と、(6d) の「pcが壊れる」では、「pcが壊れた状態である (BE AT STATE)」という意味の部分は変わらないが、そのような

状態を「引き起こす (CAUSE)」動作主主語の「太郎」が現れる (6c) の場合と、意味上は「壊す」という動作の対象であり目的語である「pc」が主語位置に現れる (6d) の場合がある。この事実は、動词语根「壊-」が持つ語彙的な意味の部分と、自動詞・他動詞の別を決定づけたり動作主主語を導入したりする機能的な部分、すなわち小動詞  $v^*/v$  が担う部分があると考えよう。英語の場合は、自動詞・他動詞共に break で同形であるが、形態素には現れなくても抽象的な小動詞が語彙動詞に結合して意味の区別に繋がっていると考えられる。小動詞には (6a)(6b)(6c) のように動作主性があって動作主主語を導入する  $v^*$  と、(6d) の非対格動詞のように動作主性のない  $v$  があると仮定されている。<sup>5</sup>

## 2. 複合動詞の内部構造

### 2.1 自他交替の構造：Sakai, Ivana, and Zhang (2004)

単一の動詞の内部構造を概観したところで、複合動詞の内部構造について考えてみよう。それはどのような方法で調べることができるだろうか。

英語の自他交替では、交替が形態的な変化として現れないため、明示的に  $v^*/v$  の存在を示すのが困難であった。

- (7) a. John opened the window.  
 b. The window opened.

(7a) の動作主が現れる他動詞文では、 $v^*$  が含まれていると考えられ、一方、(7b) の非対格文には  $v$  が含まれていると考えられるが、形態素の交替としては顕現していない。次に、これに対応する日本語の文を見てみよう。

- (8) a. ジョンが窓を開けた。  
 b. 窓が開いた。

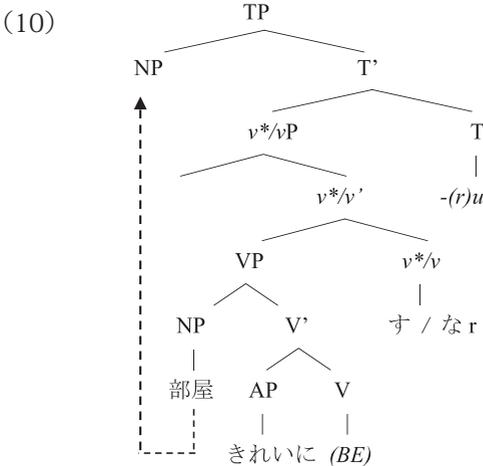
下線で示したように、自他の交替は「け」と「い」の違いとなって形態的に見ることができる。しかし、日本語でも全ての動詞で (8) の「開ける」「開く」と同様の形態素の交替が見られる訳ではなく、むしろ自他の交替のパターンは

複雑で入り組んでいる。この複雑さを取り除いて一貫した交替のパターンで観察することを可能にするために、Sakai, Ivana, and Zhang (以後Sakai et al.) (2004) では形容詞などの状態述語を用い、自他の交替、すなわち  $v^*/v$  の交替を「する」「なる」の交替として顕現させた。<sup>6</sup>

●状態述語を使った自他の交替

- (9) a. タカシが部屋をきれいにした。  
 b. 部屋がきれいになった。

(9a) の他動詞文では目的語として機能していた「部屋」が、(9b) の自動詞文では主語となって現れている。Sakai et al. は、(9a) の「する」を  $v^*$  の具現形として、(9b) の「なる」を  $v$  の具現形として分析し、次のような構造を提示した。



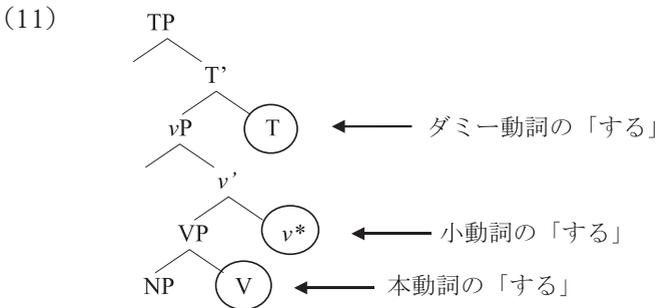
(Sakai et al. (2004: 368, 371) に状態を表す意味述語BEを加筆)

上の図で表されているように、(9a) と (9b) の文は共通の基底構造 VP を持っている。(9a) のように動作主主語「タカシ」が現れる場合は、その主語は  $v^*$  の指定部に生成され、TPへと移動する。一方、非対格文である (9b) では  $v$  が

選択され、内項の「部屋」がTPへと移動する。

さらにSakai et al. では、次の図 (11) のように、v\* の具現である「する」とそれ以外の範疇の「する」を区別するために、3つの「する」の位置とふるまいを明らかにした。本動詞の「する」以外は、「する」は機能範疇の顕現形となっている。

● 「する」が現れる3つの可能性



(Sakai et al. 2004: 353を主要部後置に改変)

まず、本動詞の「する」が現れている文を見てみよう。(12) に示されているように、本動詞の「する」は、(9)(10) で見た小動詞 v\*/*u* の時のように「なる」と交替することはできない。

● 本動詞の「する」

(12) a. セツコが同窓会の幹事をした。

b.\* 同窓会の幹事がなった。

(Sakai et al. 2004: 357)

一方、拘束形態素である時制辞や否定辞を担うために挿入されるダミー動詞の「する」は、小動詞の後に現れる。以下では小動詞を下線、ダミー動詞を波線で示す。

●小動詞の「する/なる」(下線)とダミー動詞の「する」(波線)

(13) a. セツコが部屋をきれいにしさえしなかった。

b. 部屋がきれいになりさえしなかった。 (Sakai et al. 2004: 354)

(13a) と (13b) の下線部では、「する」と「なる」の交替が見られるので、これは小動詞  $v^*/\nu$  が現れたものと考えられる。その後の副助詞「さえ」によって切り離された拘束形態素の否定辞と時制辞は、ダミー動詞の「する」によって支えられている。この波線部の「する」は、次に見るように「なる」に置き換えることはできない。

(14) a. セツコが部屋をきれいにしさえしなかった。 (= (13a))

b. \*セツコが部屋をきれいにしさえならなかった。

(15) a. 部屋がきれいになりさえしなかった。 (= (13b))

b. \*部屋がきれいになりさえならなかった。

(13) の文に機能範疇の存在を書き加えると以下ようになる。

(16) a. セツコが部屋をきれいにしさえしなかった。 (= (13a))

$v^*$                       T

b. 部屋がきれいになりさえしなかった。 (= (13b))

v                                      T

「なかつ」が否定辞で、「た」が過去を表す時制辞なのだが、この2つの拘束形態素を担うためにダミー動詞の「し」が現われている。上の (11) の分析は、英語の *do* が本動詞、助動詞、小動詞の代用表現として使われるという Stroik (2001) の議論とも共通するものであるといえる。

## 2.2 複合動詞内部の小動詞

以上で見たように、語彙範疇Vと目に見えない機能範疇  $v^*/\nu$  の境界を明確にして機能範疇  $v^*/\nu$  の存在を「する」と「なる」の交替で論じたのが Sakai et al. であった。そこで扱われたのは、「きれいに-する」「きれいに-なる」のよう



きる。この事実は、V1はその投射の上に  $v^*/v$  を持たないが、V1-V2のセットとしては1つの  $v^*/v$  を持つことを示しているといえる。これは、V1とV2の他動性が一致していなくてはならないという「他動性調和の原則」(影山 1993)に説明を与えるものである。つまり、複合動詞全体に  $v^*/v$  は1つしか含まれておらず、他動性は一致せざるを得ない (Okura 2009: Ch.4、Nishiyama and Ogawa 2009、2011、西山・小川 2013: 注9、斎藤 2014も参照)。理論的には、1つの主要部  $v^*/v$  が、V1とV2に対して多重一致 (Multiple Agree (Hiraiwa 2001)) を引き起こしていると考えられる。<sup>8</sup>

次に、タイプBの複合動詞を見てみよう。

●タイプB「統語的：他動詞型」

(22) 花子が 壁を 塗り 終えた。

(23) a. 太郎も [ そう 

し
---

 終え - た ]。  
[ V1 

$v^*$
-------

 V2 T ]

b. 太郎も [ そう 

し
---

 た ]。<sup>9</sup>  
[ V1-V2 

$v^*$
-------

 T ]

(24) メルモちゃんが魔法を使って大人に変わり 終えた。

(25) a. 太郎も [ そう 

なり
----

 - 終え - た ]。  
[ V1 

$v$
-----

 V2 T ]

b. 太郎も [ そう 

し
---

 た ]。  
[ V1-V2 

$v^*$
-------

 T ]

(23a) と (25a) は、タイプBの複合動詞のV1が投射の上に  $v^*/v$  を持っていることを示している。これは、タイプAの複合動詞とは異なる。(19a) と (21a) で見たように、タイプAの複合動詞は、V1の投射の上に  $v^*/v$  がなく、V1-V2

全体で、1つの  $v^*/v$  を持っていたのであった。

また、タイプBの複合動詞は、(23)(25) からV2の方も1つの  $v^*/v$  を持っていると考えられる。このことによって、タイプBの複合動詞に他動性調和の原則が適用されないのは、V1とV2それぞれに小動詞を持っているからであると説明できる。

最後に、タイプCの複合動詞を見てみよう。

● タイプC「統語的：非対格型」

(26) ゼリーが固まり過ぎた。

(27) a. ?アイスクリームも [ そう - なり - 過ぎ - た ]。  
 [ V1    

$v$
-----

    V2    T ]

b. アイスクリームも [ そう - \*し/なっ - た ]。  
 [ V1-V2    

$v^*/v$
---------

    T ]

(28) 太郎がしゃべり過ぎた。

(29) a. 花子も [ そう - し - 過ぎ - た ]。  
 [ V1    

$v^*$
-------

    V2    T ]

b. 花子も (仲良しの友達といると) [ そう - \*し/なっ - た ]。  
 [ V1-V2    

$v^*/v$
---------

    T ]

(27a) と (29a) の文は、V1の投射の上に小動詞  $v^*/v$  があることを示している。一方、(27b) と (29b) の文は、V2が投射の上に  $v$  を持っていることを示している。このタイプCの複合動詞に関しても「他動性調和の原則」に従わないことが、V1、V2ともに小動詞を持っていることから説明できる。

### 2.3 要約と考察

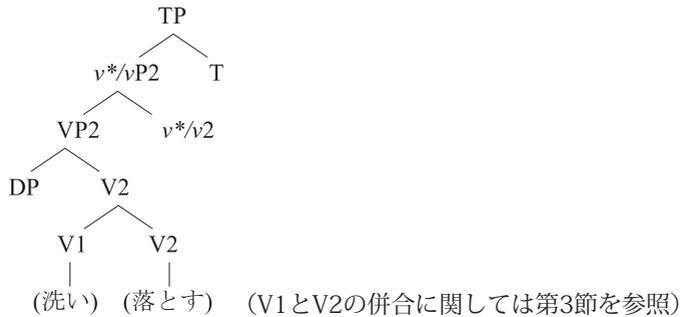
最後に、ここまでの議論を表と樹形図にしてまとめてみよう。

#### (30) 複合語のタイプと $v^*/\nu$ の存在

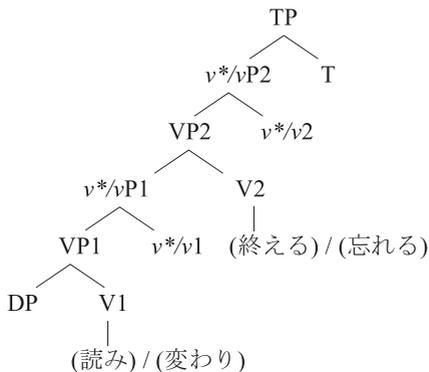
複合語のタイプ	$v^*/\nu$ の存在	V1の投射の上	V2の投射の上
● タイプ A (「語彙的」)		—	$v^*/\nu$
● タイプ B (「統語的：他動詞型」)		$v^*/\nu$	$v^*/\nu$
● タイプ C (「統語的：非対格型」)		$v^*/\nu$	$\nu$

以下の (31)-(33) の樹形図中の動詞は全て一例である。

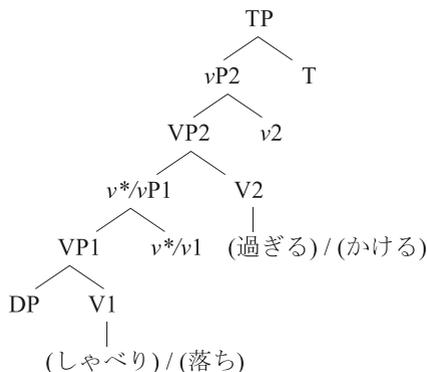
#### (31) タイプA



#### (32) タイプB



(33) タイプC



タイプAの複合動詞では、「汚れを洗い落とす」「\*服を洗い落とす」(影山 1993: 104) の対立から、V1ではなくV2の項が表出されており、V2の動詞が投射していると考えられる。

一方、タイプBの複合動詞では表出されている目的語はV1の項である。

(34) 太郎が論文を読み忘れた。

そして、V2「忘れる」の項は「論文を読む」という動詞句全体になっている。以上の点は、タイプBの構造を表した樹形図(32)で捉えられている。

最後に、多義性のある文を見てみよう。

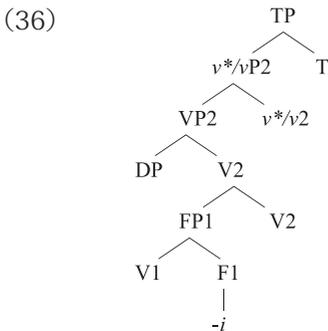
(35) 太郎が家に本を置き忘れた。 (影山 1993: 84)

この文は、影山が指摘するように、(a)「太郎が家に本を置いて、持ってくるのを忘れた」という解釈と、(b)「家に本を置くのを忘れて持って来てしまった」という2通りの解釈が可能である。これは、本稿での考え方によれば、「語彙的」「統語的」の違いではなく、(a)はタイプAの併合、(b)はタイプBの併合による違いということになる。つまり複合動詞の意味は、V、 $v^*$ 、 $v$ の併合による派生構造で決まると言えよう。

### 3. 今後の課題—連用形接辞と主要部併合

ここまで、「する / なる」の交替を使う方法で複合動詞のタイプ別のふる

まいを調べてきた。それによって、タイプBとタイプCに関しては、V1の投射に機能範疇である小動詞  $v^*/\nu$  が併合して、それがV2に併合していることが明らかになった。しかし、タイプAに関しては、この方法ではV1とV2の間に機能範疇の存在は明らかにされなかった。それでは、タイプAの複合動詞では、V1とV2が(31)の図のように語彙範疇同士で結合しているのだろうか。Nóbrega and Miyagawa (2015) で言語進化の観点から議論されているように、V1とV2が素性に頼らず結合し、語彙的な層と機能的な層の階層を持たない「原始言語」段階の構造をしていると想定するのは望ましくないであろう。<sup>10</sup> そうすると、語根としてのV1をV2に併合できるようにしている機能範疇があり、その顕現が連用形接辞 *-i* であると考えてみてはどうだろうか。接辞 *-i* で顕現する機能は多様で、三原 (1992) では時制Tとして議論されている。また、*-i* には動名詞的な機能や指示的な機能もある。例えば、「皿洗い」という動詞由来複合語を考えてみよう。ここでは、名詞「皿」は「洗う」という動詞の目的語である。「洗う」という動詞は、接辞 *-i* によって「洗い」という形になっている。このとき、「皿洗い」は、「皿洗いは楽しい」のように、皿を洗う行為を表す名詞としても解釈されるし、「新しいスタイルの皿洗いを発明した」「皿洗いを3名募集した」のように、皿を洗う機械や人を表す複合語としても解釈される (伊藤・杉岡 2002: 3.3節)。後者の場合は、接辞 *-i* が「洗う」の外項を指示するような機能を果たしているといえる。以上の考察から、1つの方向として、複合動詞のV1は *-i* で具現されるある機能範疇Fと併合しており、(31) は実は次の (36) のような構造をしている可能性が考えられるだろう。



ここで仮にFとした機能範疇の存在や働きの検証については今後の課題としたい。

#### 4. まとめ

本稿では、影山(1993)の研究を基盤とし、日本語の複合動詞の内部構造を「そうする・そうなる」代用テストを使って機能範疇  $v^*/v$  の存在に注目しながら考察した。理論的には、Hale and Keyser (1993) などで提唱されている、項構造は統語構造で規定されるという考え方を推し進め、それが単一の動詞だけでなく複合動詞にもあてはまるという仮定のもとに、あえて「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」の区別をせず複合動詞を一貫して句構造で扱った。逆から言えば、複合動詞のタイプの違いを統語構造の違いで説明することを試みたことになる。それにより、次のような結果が得られた。まず、「語彙的」複合動詞とされていたタイプに関してだが、広く見られた「他動性調和の原則」(影山 1993) が、2つの動詞に対して1つの小動詞  $v^*/v$  が併合されるという統語構造によって説明された (Okura 2009: Ch. 4、Nishiyama and Ogawa 2009、2011、西山・小川 2013: 注9、斎藤 2014も参照)。次に、「統語的」複合動詞とされていたタイプについてだが、影山は、複合動詞を形成するV1-V2について、V2の方を「助動詞」「補助動詞」のように扱って一般の語彙動詞と区別するようなことはしなかった。それは方向としては従うべきだが、例えばタイプC (非対格タイプ) に分類された「～かける」のような動詞について、なぜ語彙的な意味が薄れ、文法化しているようなふるまいをするのかが不明確であった。これについては、「NPをかける」のように目的語名詞句をとる語彙動詞の「かける」に  $v^*$  ではなく  $v$  が併合されるようになったことにより、格を必要とするNPをとらなくなり、「VP-かける」という形が可能になったと説明することができるだろう。<sup>11</sup>

また、「置き忘れる」のような複合動詞の多義性が、「語彙的」「統語的」という違いでなく、Hasegawa (1999, 2000) で議論されるように句構造の違いとして説明された。

複合語の形成は、規則性や構造が明らかにされていない部分もあり、言語進化の観点からは前段階の言語の「化石」と考えられることもあるが (Jackendoff 1999、Progovac 2015など)、本稿で論じたように、複合動詞についてはその内部に機能範疇を含む統語構造を持っていて素性照合による併合が行われているとすれば、言語として違いはないと考えられる (Nóbrega and Miyagawa 2015参照)。そのような観点からも、今後さらなる研究が期待される分野であると言えよう。

## 謝辞

私は、井上和子先生が大学院で授業をなさる最後の年に大学院に入学し、その後は先輩方が集う憧れの「井上ゼミ」に参加した。ゼミでは参加者の学年や分野を超えて自由に活発に議論が交わされ、そのまどめに井上先生が「結局ね、」という言葉に続いて鋭い洞察を述べられるのをお聴きするのが楽しみであった。井上先生は、言語学のご指導だけではなく、私が様々な困難にあった時に常に温かく手を差し伸べて下さった。長年に渡りご指導下さった井上和子先生に心からの感謝を捧げたい。

また、井上ゼミの開催にあたりご多忙の中ご尽力下さった長谷川信子先生と上田由紀子さん、ご支援下さった神田外語大学と大学院の方々に深い謝意を表したい。井上ゼミでは、メンバーの方々からいつも多くの貴重なコメントやアドバイスを頂いた。深く感謝申し上げる。

本稿は、Okura (2009: Chapter 4) の一部を修正・発展させたものである。特に本稿及び以前のバージョンの執筆にあたっては、井上和子先生、岩本遠億先生、遠藤喜雄先生、小川芳樹先生、佐野まさき先生、長谷川信子先生、宮川繁先生、渡辺明先生、上田由紀子さん、外崎淑子さん、中村たか子さん、藤巻一真さんから多くの貴重で有益なコメントを頂いた。ここに深く感謝申し上げたい。

## 注

1. ここでタイプCとしている「～かける」は、「今にも～しそうである」という意味のもので、「書きかけの手紙」のような既に始まっている「～かける」は議論に含めない。また「～かける」には、「人に話しかける」「事務所に詰めかける」のように方向性を表すものもあるが、影山はそれをタイプAとしている。
2. 語彙的複合語と統語的複合語を区別するために影山（1993）で使われたテストには、「そうする」による代用、主語尊敬化、受け身化、サ変動詞の出現、動詞重複の5つの操作や現象がある。また、語彙的複合語は動詞の結合に制限があり、統語的複合語よりも生産性や意味的透明性が低いとされている。
3. 影山（1993）では後半の議論で、(4a) の図に挙げた「～終える」を含め、「～尽くす、抜く、忘れる、直す、残す、合う」はV型補文をとるとし、「～そこなう、そびれる、遅れる、飽きる、つける」はVP型補文をとるとしている。

4. 影山（1993）では、格助詞が脱落すること、PROが生起しないことなど、非対格主語が他動詞の目的語とS構造（以降）のレベルにおいても平行的なふるまいをすることを挙げ、表層においても非対格構造が保持されているとしている。
5. (6a-c) の図では、語彙概念構造におけるDOとCAUSEの違いは考慮に入れずに小動詞を  $v^*$  としている。
6. Hasegawa（2000）では、動詞の自他交替の形態素（開く・開ける:ak- $\phi$ -u・ak-e-ruの下線部）がそれぞれ  $v$  の要素として分析されている。Hasegawa（1999, 2000）では、「金属を平らにたたきのばす」「ゴミを部屋の隅に掃き寄せる」のようなV-V複合動詞を結果構文の1つとして議論し、結果述語を導く機能範疇による統語派生が提案されている。
7. (21b) のように「なる」への置き換えについては、複合動詞の事象が結果状態を含意するかどうかによって容認性の高さが異なるが、少なくとも「する」よりは容認性が高いと思われる。この点については今後さらに検証すべき課題としたい。
8. Multiple Agreeについては渡辺明先生にご示唆頂いた。また、(19a)(21a) が非文法的となるのは、V1の投射がVやVPでなく  $V^0$  なので「そう」に置き換えられないためとも考えられる。その場合、ここで提案する(31)の図と矛盾はしないが、V1の上に  $v^*/\nu$  がないとは言い切れない。
9. (23b) の文は、V2の「終える」が意味に含まれるか判断に揺れがあるかもしれないが、(i) 私は今日、壁を塗り終えよう。(ii) 僕もそうしよう。というような意志性のある文では、(ii) に「終える」の意味が含まれるという判断が可能であろう。
10. 2015年7月25日開催の井上ゼミでの宮川繁先生の助言による。
11. Okura（2009: Ch. 4）では、副助詞「さえ」を使って複合動詞の内部構造を分析した結果、タイプCの複合動詞のV1とV2の間に小動詞ではない機能範疇（Asp）がある可能性が見出された。このような機能範疇を併合しているとする、V2の「～かける」のような動詞が始動相をもつという特性が、V1/ $\nu$ 1の投射と直接併合せずAspを選択するという選択制限で説明されることになる。

## 参考文献

- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52. MIT Press, Cambridge, MA.

- Dowty, David (1979) *Word Meaning and Montague Grammar*, Reidel, Dordrecht.
- Jackendoff, Ray (1999) "Possible Stages in the Evolution of the Language Capacity," *Trends in Cognitive Sciences* 3, 272-279.
- Hale, Kenneth and Samuel J. Keyser (1993) "On Argument Structure and the Lexical Expression of Syntactic Relations," *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*, ed. by Kenneth Hale and Samuel J. Keyser, 53-109, MIT Press, Cambridge, MA.
- Hasegawa, Nobuko (1999) "The Syntax of Resultatives," *Linguistics: In Search of the Human Mind-A Festschrift for Kazuko Inoue*, ed. by Masatake Muraki and Enoch Iwamoto, 178-208, Kaitakusha, Tokyo.
- Hasegawa, Nobuko (2000) "Resultatives and Language Variations: Result Phrases and VV Compounds," *Japanese/Korean Linguistics* 9, 269-282, CSLI Publications, Stanford, CA.
- Hasegawa, Nobuko (2001) "Causatives and the Role of *v*: Agent, Causer, and Experiencer," *Linguistics and Interdisciplinary Research: Proceedings of the COE International Symposium*, ed. by Kazuko Inoue and Nobuko Hasegawa, 1-35, Kanda University of International Studies, Chiba.
- Hiraiwa, Ken (2001) "Multiple Agree and the intervention constraint in Japanese," *The Proceedings of the MIT-Harvard Joint Conference (HUMIT 2000)*, *MIT Working Papers in Linguistics* 40, ed. by Ora Matsushansky et. al, 67-80.
- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語 (上・下)』大修館書店, 東京.
- 伊藤たかね・杉岡洋子 (2002) 『語の仕組みと語形成』研究社, 東京.
- Kageyama, Taro (1989) "The Place of Morphology in the Grammar: Verb-Verb Compounds in Japanese," *Yearbook of Morphology* 2, ed. by Geert Booij and Jaap van Marle, 73-94, Foris, Dordrecht.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房, 東京.
- 久野暉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店, 東京.
- Marantz, Alec (1997) "No Escape from Syntax," *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics* 4.2, ed. by Alexis Dimitriadis, Laura Siegel, Clarissa Surek-Clark and Alexander Williams, 201-225.
- 三原健一 (1992) 『時制解釈と統語現象』くろしお出版, 東京.
- Nakau, Minoru (1973) *Sentential Complementation in Japanese*, Kaitakusha, Tokyo.

- Nishiyama, Kunio and Yoshiki Ogawa (2009) "Atransitivity and Auxiliation in Japanese V-V Compounds: Implications for Thematic Structure and Restructuring," ms., Ibaraki University and Tohoku University.
- Nishiyama, Kunio and Yoshiki Ogawa (2011) "Auxiliation, Atransitivity, and Transitivity Harmony in Japanese V-V Compounds," 神田外語大学大学院紀要『言語科学研究』(特別号)「談話のカートグラフィー研究：主文現象と複文現象の統合を目指して(2)」, 遠藤喜雄(編), 239-291.
- 西山國雄・小川芳樹(2013)「複合動詞における助動詞化と無多動性」『世界に向けた日本語研究』, 遠藤喜雄(編), 103-133, 開拓社, 東京.
- Nóbrega, Victor A. and Shigeru Miyagawa (2015) "The Precedence of Syntax in the Rapid Emergence of Human Language in Evolution as Defined by the Integration Hypothesis," *Frontiers in Psychology* 6, 1-8 (Article 271), doi: 10.3389/fpsyg.2015.00271.
- Okura, Naoko (2009) *Applicative and Little Verbs: In View of Possessor Raising and Benefactive Constructions*, Doctoral dissertation, Kanda University of International Studies.
- Progovac, Ljiljana (2015) *Evolutionary Syntax*, Oxford University Press, New York.
- Pylkkänen, Liina (2002) *Introducing Arguments*, Doctoral dissertation, MIT.
- 斎藤衛(2014)「複合動詞の形成と選択制限 他動性調和の原則を手掛かりとして」『複雑述語研究の現在』, 岸本秀樹・由本陽子(編), 207-233, ひつじ書房, 東京.
- Sakai, Hiromu, Adrian Ivana and Chao Zhang (2004) "The Role of Light Verb Projection in Transitivity Alternation," *English Linguistics* 21, 348-375.
- 柴谷方良(1978)『日本語の分析』大修館書店, 東京.
- Stroik, Thomas (2001) "On the Light Verb Hypothesis," *Linguistic Inquiry* 32, 362-369.
- Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press, New York.